

# 関西・大阪文化力会議201

主催：(財)大阪21世紀協会 共催：大阪国際フォーラム 協賛：(株)大阪国際会議場

## 文化の力で、生命資本主義の時代へ



李 御寧 (イオリョン) 氏  
韓国初代文化大臣

日本の文化に精通し多数の著書を持つ韓国の初代文化大臣、イ・オリョン氏。基調講演では、文化とはなにかを定義し、日本文化が形成されてきた過程からその本質を解明。日本、韓国、中国をはじめとする東アジア諸国が、今後歩むべき指標について大局的な観点から提起を行った。

## 世界はなぜ文化を重視するのか

文化という言葉はとても定義しにくいもので、今、使われている意味だけでも130を超えるそうです。1000人の文化人類学者がいれば1000の定義があるということです。欧米で初めて文化という言葉が辞典に載ったのは1793年、ドイツ国語辞典といわれています。「culture」は、ラテン語で「耕作する」「住む」「宗教的な崇拜」を意味する言葉です。日本では江戸時代に文化という言葉年号(1804~1817)があります。そのときの文化とは文治教化を意味し、武力で国を治めるのではなく文化=徳や教養で治めることを指しています。その次は明治に入り、文明開化という意味で使いました。西洋から新しい文化が入ってきたときの文明開化を訳して文化という言葉を使いました。けれども現在は日本、韓国、中国でも、西洋のcultureという意味で文化という言葉が使われています。

歴史を遡れば、軍事力と経済力があれば国の力が世界に通用する時代がありました。今も実情はそう変わっていませんが、ではなぜ人々が文化力というものを重視するのか。それは、軍事力と経済力を発揮するために文化力というひとつの基盤がなければならぬからです。現代のアメリカはハリウッドに代表されるようなメジャーな文化、そして英語という言葉が世界に通用するからこそ世界を支配しているのです。

世界中で今、文化や宗教、文明の衝突が頻発しています。世界の文化力とはなにかを本気になって考えなければならない時代になっています。日本は戦後、自衛隊となったものの軍事力もあり、経済力は世界トップクラスです。中小企業でも世界に通じる技術力をたくさん持っています。レアアース、レアメタルの世界最大の消費国は日本です。そして中国の輸出規制を何年も前から想定し、シャープなどではすでに代替マテリアルの開発にほぼ成功しています。こういう観点に立つと、軍事力と経済力を併せ持つ日本に今、最も重要なのはまさに文化力といえるでしょう。

## 文化は弱いもの、だからこそ必要

じつは私は、文化は力ではないと思っています。文化を力と見ると、中国の文化大革命のような大変なことが起こる。日本の軍国主義は、日本人の心に深く根づいた花の文化である桜を使い、「花と散れ」と軍事力を後押ししました。文化は力ではなく本当は弱いものです。しかし弱いからこそ必要なのです。文化そのものに対するコンセプトを変えなければなりません。

文化というのはじつに微妙なものです。韓国が日本の植民地だった時代、日本人が使う「キムチ」という言葉には韓国人への差別や偏見も含まれていました。これを食べる者はニンニク臭いと。しかし日本人がどんどんキムチを食べるようになり、韓流ブームが起こるとキムチはひとつの食文化として日本人に受け込んでいきます。ヨン様ブームもそうです。『冬のソナタ』は韓国でもヒットしましたが、日本のように大量のヨン様グッズが作られDVDが売れるような大ブームにはなりません。ヨンは日本に来て、日本独自のヨン様になったのです。村上春樹の小説も韓国では大変な人気ですが、それと反日感情は全く関係ありません。これらの現象を見ると文化は普遍的ではなく、個性を持ち、政治、民族、歴史といった社会背景を超えていく力がある。これは文化と宗教だけでしょう。

## 文化は対立するものの橋渡しをする

20世紀の生物学者ゲーレンは、人間は猿が進化した生物ではなく、形態学的にサルの胎児の進化が停滞した「欠陥動物」であるといっています。生きていくための手段を欠いているため、直立し、言葉をつくり、技術をあみ出し、文化的手段を講じて欠陥を補完するようになったのです。そんなふうにと考えると文化というものが理解し

やすいのではないのでしょうか。全ての生物は生来的に与えられた能力で生きていける。進化も文化も必要ない。この自然の秩序から離れ、自然以外の環境を創り出さなければ生きていけない生物、それが人間なのです。

猿は、敵が襲ってくると4本の手足を使って木に登って逃げることはできますが、両手しか使えない欠陥の猿(人間)はそれができません。皆さんならどうして敵から身を守りますか?対策がなければ死ぬのです。ふと見れば地面に石ころが転がっています。ならばそれを手に取り敵に投げればいいのです。この行為が私たち人間を生かしてきました。自然の石はそこで文化の石になったんです。それを投げた瞬間、石は身体から離れて飛んでいく。敵に触れることなく身を守る、新たな抽象的空間を出現させたのです。そうしてもっと遠く、もっと早く投げることで欠陥を補ってきた。これが文化なのです。

古事記のなかで、最初の神、イサナギは妻のイザナミが死に黄泉の国に行ってしまうと恋しくてたまらなくなり訪ねていきます。そこで見たものは体中に蛆がわいたイザナミでした。イサナギはその姿に怖れて必死で逃げます。追いかけてくるイザナミに彼は蔓草の髪飾りを投げ、櫛を投げ、最後には桃を投げて逃げ切り、黄泉の国の入口を岩でふさぎます。そこでイザナミは言います。「そんなことをするとこれからあなたが生む命を1000名ずつ殺してやる」と。イサナギは「それなら私は1500名ずつ新しい命をつくらう」と言います。死の国と生命のある国の境で何か





が生まれる。そこから初めて文化は始まったのです。死と生という異質なものの、すべての対立するものの調整をしたり接触点をつくったり、橋渡しをするもの、これが文化なのです。これは戦争や科学の世界にもありますが、特に芸術の世界にそれが多く、異質な心と心を結びつける力なのです。

## 身体性のある文化とない文化

文化には身体性のないものと身体性を持つものの、2つのシステムがあります。先ほど話した石を投げる文化には身体性がありません。体から離れていく抽象的な文化で、石、銃、ミサイル、そしてインターネットもそうです。西洋の文化はこれに当てはまる合理性や数字の世界です。

例えば聖書にあるソロモンの名判決にも、西洋文化の特徴が表れています。それは、二人の女性が一人の子どもを取り合って互いに母親だと主張した話です。裁判官が「それでは子供を2つに分けて持って行け」と命じ、刀で切ろうとすると、「切るな！」と叫んで子どもを護ったほうが本当の母親とみなされました。こんなむちゃな判決がありますか。人間を半分に切って分けるという発想は東洋にはありません。自然の体や生命から離れたシステム、それがいかに今の文明、軍事力や経済力を保ってきたか。ミサイルの弾道を計算するコンピュータやインターネットがいかに人間の身体から遠く離れたものか、それによって築き上げている今の世界の文明とはなんなのか。それを考えずに文化を語ると、文化は軍事力や経済力を援助する力になってしまうのです。

一方、身体から、自然から離れていないのが東洋の文化なんです。ノエル・ペリンの著書『鉄砲を捨てた日本』にもありますが、戦国時代、種子島に入ったたった2丁の鉄砲がわずかな年数で波及し、織田信長は3000丁の鉄砲で武田信玄の軍勢を全滅させます。それだけ鉄砲の威力を知り、つくる技術を持ちながら江戸幕府は鉄砲を一斉に捨て去るのです。鉄砲には身体性がないからです。手の延長線上にある刀で対面して

闘う、刀は武士の魂であると。西洋人にとってこれは非常に奇異に感じるでしょう。日本人が再び鉄砲を使うのは、明治維新のときです。今でも日本人は手に持たない抽象的なものは苦手です。

それでは弓矢の文明はどうでしょう。それは不確実性を伴います。森鷗外の『雁』の一文を見ましょう。

「雁に石を投げて打ち当てると石原は言うので、岡田はかわいそうだから逃がしてやると言っ、雁に当たらぬように石を投げる。ところが案に相違して石は当たり雁は死ぬ」。これは投げるといいう行為によって、自分の心や世界とは全然違った結果を生んでしまうということを示しています。その收拾をつけるためには、合理性や技術などを得なければならない。だから人間のつくりだした文明はみんな、その思いつきとは関係なく一人歩きをする。だからさらにそれに歯止めをかけるための装置、すなわち科学や文化が必要だったのです。

## 外に向かう文化と引き寄せる文化

日本における身体性のある文化のもうひとつの大きな特徴に「引き寄せ文化」があります。遠くにあるものを引っ張ってきて自分の体にくっつける。出雲国の神話「国引き神話」では、国が狭いので他の国の余った土地を引いてきて足そうとする。征服に行かず引っ張ってくる。これは日本独特の考え方です。

神道と仏教の違いを一言で表した「神は来るもの、仏は行くもの」という言葉があります。仏教は仏様を拜んで西方浄土の極楽へ行くもの、しかし日本の神様はお祈りすると神が降りてくる。韓国ではシャーマンは踊って空に登り自分で神様のところに行こうするのですが、日本は違います。天から下っていただく。ご神体が山に降りるとそれを引っ張ってきて宮をつくり、さらに里にも宮をつくり、御輿をつかって村全体に連れて行く。また家の中まで引っ張ってきて神棚をつくり、それでも満足せずお守り袋を身につけるのです。綱引きもそうです。日本では今でも盛んです。韓国にはありません。集団の力をひとつに合わせる。

逆に身体性のない投げる文化は個人の力ですから個人的になる。

日本にはもちろん、投げる文化と引き寄せる文化の二つの文化がありますが、歴史のなかで見ると力を合わせて引き寄せる文化が多い。このように外に向かって拡大していくものと、自分の身に外から引き寄せてくる2つのダイナミックなベクトルによって、全然違った文化が現れてくるのです。

## 花はデジタル文化を超える

昨年、『ガラバゴス化する日本』という本が話題になりました。日本はいかにガラバゴス化から脱出するのか、その対応策はあるのでしょうか。また昨年はアップル社のCEO、スティーブ・ジョブズが開発したアイパッドでコンピュータの世界に第三の波が押し寄せました。そこにツイッター、フェイスブックも加わり情報社会というものさらに身近なものになっていく。ジョブズはアイパッドによって身体とコンピュータを隔てるキーボードをなくし、触れるという身体性を持たせたのです。そうするとどこでも自分の体を使って発信できます。ジョブズは西洋人としてはとても珍しく、彼のような考え方の人間は本来、東洋で現れてくるタイプなのです。日本や韓国は半導体をはじめ情報のハードウェアをすべて持ちながら、コンテンツ、ソフトウェア、インターフェイスではすべて西洋に負けている。どうしてスティーブ・ジョブズのような人が韓国や日本から出ないのでしょうか。

梅と桜の花を例にとると、万葉集では大陸の文化が日本にやって来て萩や梅の花が数多く詠まれました。それが新古今集になると桜が台頭してきます。国学、つまり日本的なものになると桜が出てくる。日本では花は文化なのです。ところが人間と花は本来関係がない。人間は蜂や蝶ではないからです。それでも花を愛でる、詠む。これが純粋な文化の在り方なのです。そうして日本がつくった花の文化は、梅から桜へ、大陸の文化を引き寄せ日本独特の文化へと変えていくのです。江戸時代後期の

書家、二川相近は「花より明るみ吉野の春の曙見わたせばもろこし人も高麗人も大和心になりぬべし」と詠みました。中国人も韓国人も吉野の桜を見ればみんな大和心になるだろうと自慢しています。

また、美しい桜は日本の心だといったのに戦争になると花と散れ、潔く死ぬという軍国主義のシンボルとして現れる。いかに文化とは恐ろしく、でっちあげられやすいものか。文化の力をどこに、どう使うかによって世界はすぐ変わります。本居宣長は日本の文化を清く明るい心と定義しました。特に大陸からきた儒教や仏教にはない日本だけの美しく純粋な心だということです。しかしそれが別の解釈をもったとき、ガラパゴス化する日本が現れるわけです。現代における新しい文化をつくるパラダイムがないと日本はますます引き寄せ文化に詰まってガラパゴス化してしまいます。

### 生命力となって人を幸せにする文化

韓国は半島であり、2000年の歴史のなかには占領された時期もあり、踏みにじられても生きようとする生命力を培ってきました。それが、まさに弱さから生まれた韓国の文化の強さです。文化力から生命力に向かっていく。これを民族共同体、アジア共同体ではなく生命共同体と読めば、日本、中国、韓国はおろか全ての生きとし生けるものが共同体として生きる、自分の生まれた土地を愛する、生命力を愛し新しいものに向かっていくというトポフィア、バイオフィリア、ネオフィリアの考えになります。この3つのベクトルが今、新しい文化をつくっていくのです。

物理的力や物質を基にした産業資本主義、金融資本主義のパラダイムに代わる生命資本主義。ひとつの文明の大きな流れのなかで日本、中国、韓国の文化力を見るとき、文化がいかに生命力となって人間を幸せにするのかという「生命資本主義」の発信が、東アジア、特に日本、韓国から生まれてくるのです。

投げる文化と引き寄せの文化を対立として取り上げてきたのを、今からは

融合した形に変える。デジタルとアナログの文化をひとつにした デジログ (digilog) 型の文化がアジアから発信される時代になったのです。身体性をもつものへ。インターネットも身体性をもつものにするのが重要です。いかに今のサイバー世界を変えていくか。私は韓日ワールドカップの開催当時、17か国の言語を携帯電話を利用してリアルタイムに同時通訳を可能にした bbb という通信システムを作りました。外国語を話す3,000名の専門家からなるボランティアを集めて携帯電話のネットを利用し、デジログの技術をいかしたものです。新千年準備委員会委員長だった私は、その前から投げ型のデジタル技術と引き寄せ型のアナログ身体性を融合した文化を創り、20世紀から21世紀に変わる瞬間、生まれたばかりの赤ん坊の泣き声を世界中に中継しました。韓国は新しい1000年を生命の声から迎えたのです。これがアジア人の心です。

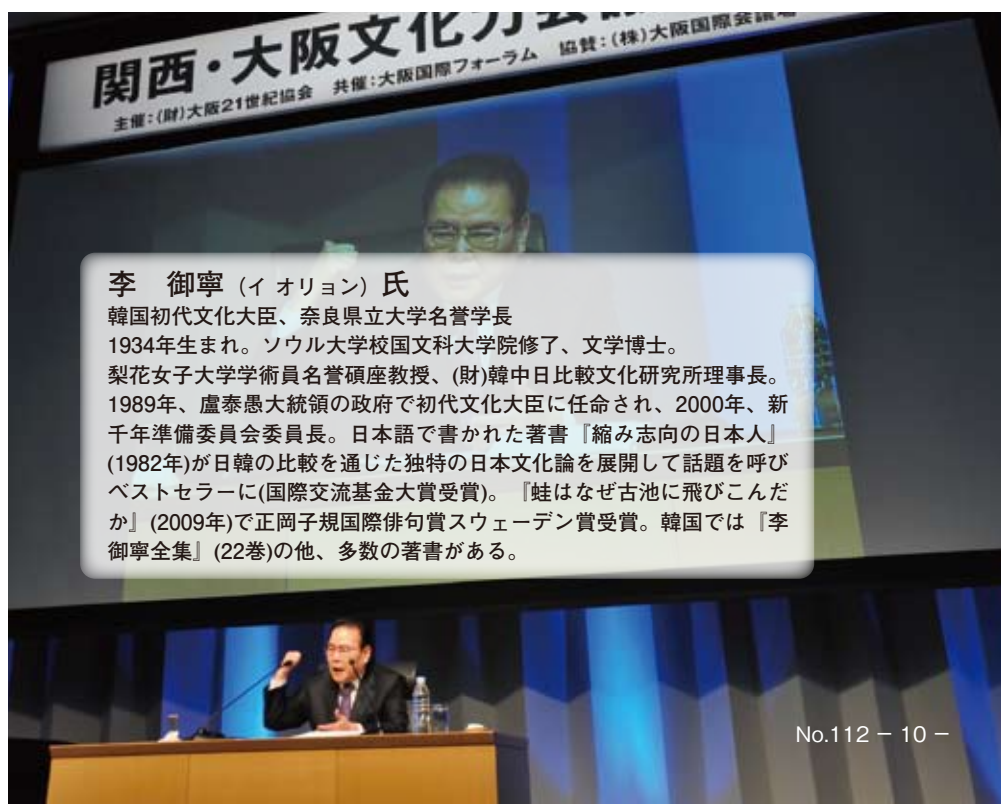
### 浪花の文化と生命の文化の融合

大阪は商人、町人の社会です。江戸の武家社会、京都の公家社会の建前の文化とは味が違う人間のリアリティがある。日本人は仕事ばかりするといわれますが、仕事をする者は飽きない。それこそ仕事を楽しむ、仕事自体がおもしろいのだと。「商いは飽きない」と

いう素晴らしい言葉を作った特異な文化をもったトボスが今の大阪です。大阪は仕事に遊び心がある、そこが素晴らしい。お金を儲ける、しかし儲けるだけではない精神を大切にしてほしいと。そういう浪花の文化と知識から知恵に移っていくソフトパワーを抱き合わせると、デジタルとアナログが融合した新しい生命力をはらんだ素晴らしい文化が生まれるのではないかと私は思っています。

韓国の投げ型の文化と日本の引き寄せ文化がひとつの輪を作ると、日本はガラパゴス日本列島からもっと広い生命共同体に向かって胸を開くでしょう。

今、地球がおびえている気候の変化、マネーの金融危機、暴力に変わっていく文明の衝突、そして トランスメディアのデジタル文明のビッグバン。日本だけがこのような生命の脅威から自由だとはいえません。大阪の経済の停滞から抜け出る穴として、文化の力を借りる心からは本当の文化は生まれてこない。襲って来る危機に向かい石を拾って投げた最初の猿になることによって、我らは最も人間的な生命の文化を手にすることが可能になると思います。それから今までなかった新しいビジネスモデルが現れ、大阪が最も幸せな繁栄の都市に創られると私は確信しています。ご静聴ありがとうございました。



#### 李 御寧 (イ オリョン) 氏

韓国初代文化大臣、奈良県立大学名誉学長

1934年生まれ。ソウル大学校国文学部大学院修了、文学博士。

梨花女子大学学術員名誉碩座教授、(財)韓中日比較文化研究所理事長。

1989年、盧泰愚大統領の政府で初代文化大臣に任命され、2000年、新千年準備委員会委員長。日本語で書かれた著書『縮み志向の日本人』(1982年)が日韓の比較を通じた独特の日本文化論を展開して話題を呼びベストセラーに(国際交流基金大賞受賞)。「蛙はなぜ古池に飛びこんだか」(2009年)で正岡子規国際俳句賞スウェーデン賞受賞。韓国では『李御寧全集』(22巻)の他、多数の著書がある。